個人住宅建設に伴う発掘調査

三 谷 遺 跡

2012

長野県辰野町教育委員会

三 谷 遺 跡

2012

長野県辰野町教育委員会

序

辰野町北大出地域は、元来畑勝ちな土地柄で、江戸時代から水を求めて度々用水路の開発計画が持ち上がり、開削を行ってきた地域です。

西山のこの広大な土地がようやく水田開発できたのは、昭和13年に西天竜幹線導水路が通水してからとなります。

このような地理的な条件は、縄文時代にも影響を与えており、北大出地区の遺跡の分布も、水の便に影響されて展開しています。

三谷遺跡も、町の境界である桑沢川沿いに位置し、水を求めてこの場所に所在していることが想像されます。

この遺跡の調査は、北大出地区では初めての本調査であると同時に、個人住宅の建設に関連した初の本調査でもあります。

今後個人住宅の建設を含め、小規模な開発に伴う調査が実施される可能性がありますが、引き続き記録保存等の保護措置を積極的に実施していきたいと考えております。

末筆となりましたが、発掘調査に深いご理解を賜り、住宅建設のスケジュールを調整していただきました桑澤徹也氏および、調査に直接携わって頂いた関係者の皆さんに御礼を申し上げ、ご挨拶と致します。

平成24年11月

辰野町教育委員会

教育長　古村　仁士

例　　言

1．この報告書は個人住宅建設に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字伊那富9204番地４に所在する三谷（みつや）遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、辰野町教育委員会が実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。

3．発掘調査は、平成24年３月27日から平成24年４月10日まで現場の作業を行い、平成24年７月２日から平成24年11月30日までの間、遺物整理及び報告書の作成を実施した。

4．発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は板倉裕子、大森淑子が行い、遺物等の実測図及びトレースの作成は板倉裕子、大森淑子、早川裕美子が行った。

5．調査時及び、整理時に作成した実測図及び写真は、辰野町教育委員会で保管している。

発掘調査関係者名簿

調査主体者	古村仁士（辰野町教育委員会教育長）
事務局	向山　光（辰野町教育委員会教育次長）
	有賀　誠（辰野町教育委員会教育次長補佐）
	福島　永（辰野町教育委員会文化係長）発掘担当者
	森本優子（辰野町教育委員会文化係）
発掘調査協力者	高木四郎、板倉裕子、大森淑子
	㈳上伊那広域シルバー人材派遣センター（佐藤勝吉、山寺勉）
整理作業協力者	板倉裕子、大森淑子、早川裕美子、村上茂子

目　　次

序
例　　言
第Ⅰ章　位 置 と 環 境…… 1
　1．地 形 ・ 地 質…… 1
　2．歴 史 的 環 境…… 3
第Ⅱ章　調 査 の 経 緯…… 5
　1．保護協議の経過…… 5
第Ⅲ章　発　掘　調　査…… 7
　1．調 査 の 方 法…… 7
　2．調査結果の概要…… 7
第Ⅳ章　遺 構 と 遺 物…… 8
　1．土　　坑…… 8
　2．ピ ッ ト…… 12
　3．遺構外出土遺物…… 14

第Ⅴ章　ま　と　め…… 15

報告書抄録
写 真 図 版

第Ⅰ章　位置と環境

1．地形・地質

⑴　地　　形

辰野町は、長野県のほぼ中央部、北は松本平、東は諏訪盆地に接し、西は木曽山脈を経て木曽谷へと通じる、南北約70㎞の伊那谷の最北部に位置する。町内を取り囲む山は、西を木曽山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の６つの山魂が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境にして南部は標高700m～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、東山丘陵は辰野町で最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれた最低部を、町を南北に縦断するように南流している。また、天竜川の西部では、横川川や、町内の天竜川の支流としては横川川に続く流路距離を誇る小横川川の上流部に、横川渓谷に代表されるようなＶ字谷が深く入り込んでおり、下流では川幅がひろがって小規模な谷底平野・段丘・崖錐が発達している。さらに、西山の山麓部には扇状地の発達が顕著であり、特に楡沢山～桑沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

さらに、辰野町の境界付近を含む権兵衛峠－経ヶ岳－牛首峠－善知鳥峠（うとうとうげ）の連なりは、南北分水界となっており、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込んでいる。

また、辰野町のほぼ中央部に位置する荒神山は、その両側を河川の浸食によって削り取られた、いわゆる残丘で、天竜川はこの残丘の西部を迂回するように流れている。このため、山麓には小規模ながら河岸段丘が発達しており、大きく４段（南麓は詳細には６段）に区分することができる。

今回調査を実施した三谷遺跡は、西山山麓の扇状地上に存在し、桑沢川の流れにほど近く、東には遠く仙丈岳を望み、眼下に伊那谷の広がりを感じる風光明媚な地点である。

⑵　地　　質

長野県は東部にフォッサマグナが存在し、その西縁には日本を代表する大断層である糸魚川－静岡構造線がはしっている。また、南部には中央構造線が東西に縦走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯、いわゆる領家帯の東端部にあたる。このため、赤石山地は辰野町南部で途切れ、木曽山脈の花崗岩についても辰野町付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、その上部に領家花崗岩がのり、その後、諏訪湖ができる以前に流入してきた、いわゆる塩嶺累層と呼ばれる礫層や、辰野地域南部からのいわゆる赤羽層や唐沢礫層といった礫が流入した。なお、塩嶺累層が不整合に赤羽累層や唐沢累層を覆っている様子が町内各地で観察されている。その後、霧ヶ峰方面の火山活動が活発化し、溶岩や火砕流、土石流が流入し、この地域の地質的な構造ができあがった。

また、南方プレートや、東方プレートの押し寄せる力によって隆起を始めた木曽山脈や、赤石山脈の衝突境界としての構造盆地として形成された町中央部の谷に、約20万年前に急上昇した木曽山脈を中心とした砂礫が堆積して現在の平地を形成している。辰野地域ではこの堆積層は浅く、100m未満といわれている。

第１図　遺跡位置図（S＝1/50,000）

また、伊那谷は西部や東部の山麓に大きな断層が走っており、辰野町内でも各所において断層地形や、露頭による観察が行われている。代表的なものとしては上島、宮所、高畑、天狗坂、赤渋地籍を結ぶ赤渋断層や、唐木沢、上辰野、下辰野公園を結ぶ上辰野断層等があげられる。これらの断層の中でも、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層群」と呼ばれ、昭和４年に春日琢美によって新町区の上水道水源地の掘り割り地点で、テフラ層が山地側に約2.3m上昇している断層が観察されたのをはじめ、後山地籍においては断層によって尾根が孤立し、稗塚と呼ばれる丸山が形成されているほか、北大出の明神山では古い扇状地が活断層によって持ち上がった様子が確認されるなど、多くの断層が存在することをうかがわせている。

なお、横川川や小横川川は奈良井川と同様に北に流れる川であったものが、断層の横ずれによって南流するようになった様子が流路や地形からうかがうことができる。

遺跡の立地する北大出区三ツ谷地籍は、前述のとおり桑沢山山麓の扇状地上に位置しており、礫を含む暗褐色系の土である。

2. 歴史的環境

三谷遺跡は北大出地区に所在する。伊那谷は、この地域から平野部の広がりを見せはじめる。

北大出地区が文献に登場するのは、武田信玄の福与城攻めの際、藤沢頼親の援軍に駆けつけた小笠原長時の軍が、「鞍掛」に陣を張ったという記載が初見である。その後、上諏訪造宮帳（天正７年）や、御検地縄帳（天正19年）、市岡文書の京極高知宛行状（文禄２年）に北大出の地名を見ることができる。

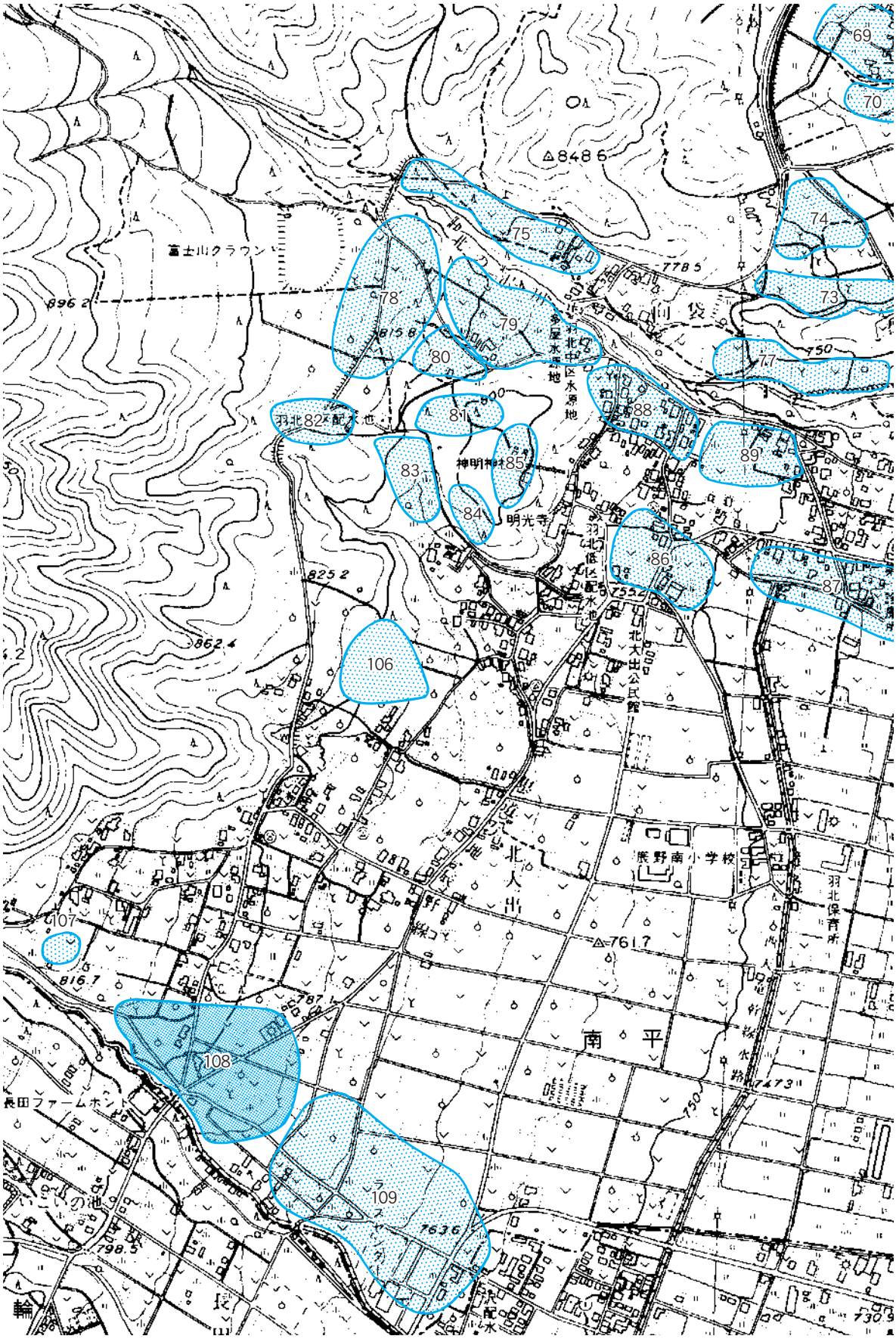
北大出地区の集落は、主として扇状地上に展開する地区であるため、水の確保の難しい地域で、元禄検地帳によれば、当時の北大出村は水田８町７畝13歩、畑32町８反８畝16部と、畑勝ちな地域であった。その後、安政６年に天竜西井筋（伝兵衛堰）が開削され、さらに西天竜幹線導水路の完成によって、この地域では十分な農業用水の確保ができるようになったのである。また、生活用水は「小路」と呼ばれる集落単位に水を引き、厳しい規制を設けて管理し、現在も使用され続けている。

このことを見ても、北大出地区の遺跡の分布は、水の確保が容易な河川や湧水地に偏在せざるを得ない状況を理解することができる。

分布の状況をみると、富士山（ふじやま）の扇状地扇端部には、日向遺跡（78）があり、富士山グランドの拡張に伴う試掘調査によって、縄文時代中期中葉（藤内期）の土器を伴う住居址が検出された。同じ扇状地に立地する大日尻（だびじり）遺跡（82）では、駐車場造成時に、平安時代後半期の破片を伴う住居址が数基確認された。そのほか、未調査で状況は把握できていないが、この地域には北大出池の久保（80）・御手洗（81）・丸山北（83）・神明山（84）・神明神社（85）の各遺跡が展開している。

また、日影（79）・多屋小路（88）・北大出内城（89）、三谷（108）・北大出大原遺跡（109）のように、北の沢や、桑沢川沿いに広がる遺跡、宮下（86）・山田遺跡（87）のように湧水の流れ下る地点に分布する遺跡等がある。また、堂寺遺跡（107）からは、火葬された成人女性の骨の納められた古瀬戸の四耳壷が出土しているが、この地区は、平安時代末期の薬師如来座像が安置されている桑沢山薬王寺（真言宗）が一時堂宇を構えたともいわれている場所であり、被葬者はこの寺に関係のある人物とも推定されている。

そのほか、天竜河畔の段丘上に展開している遺跡として、若宮・若宮東・若宮西・沢尻東原・橋爪・森下第一・森下第二・森下第三・萩原北・萩原南遺跡などが存在する。



第２図　周辺遺跡分布図（S＝1/10,000）

第Ⅱ章　調査の契機と経過

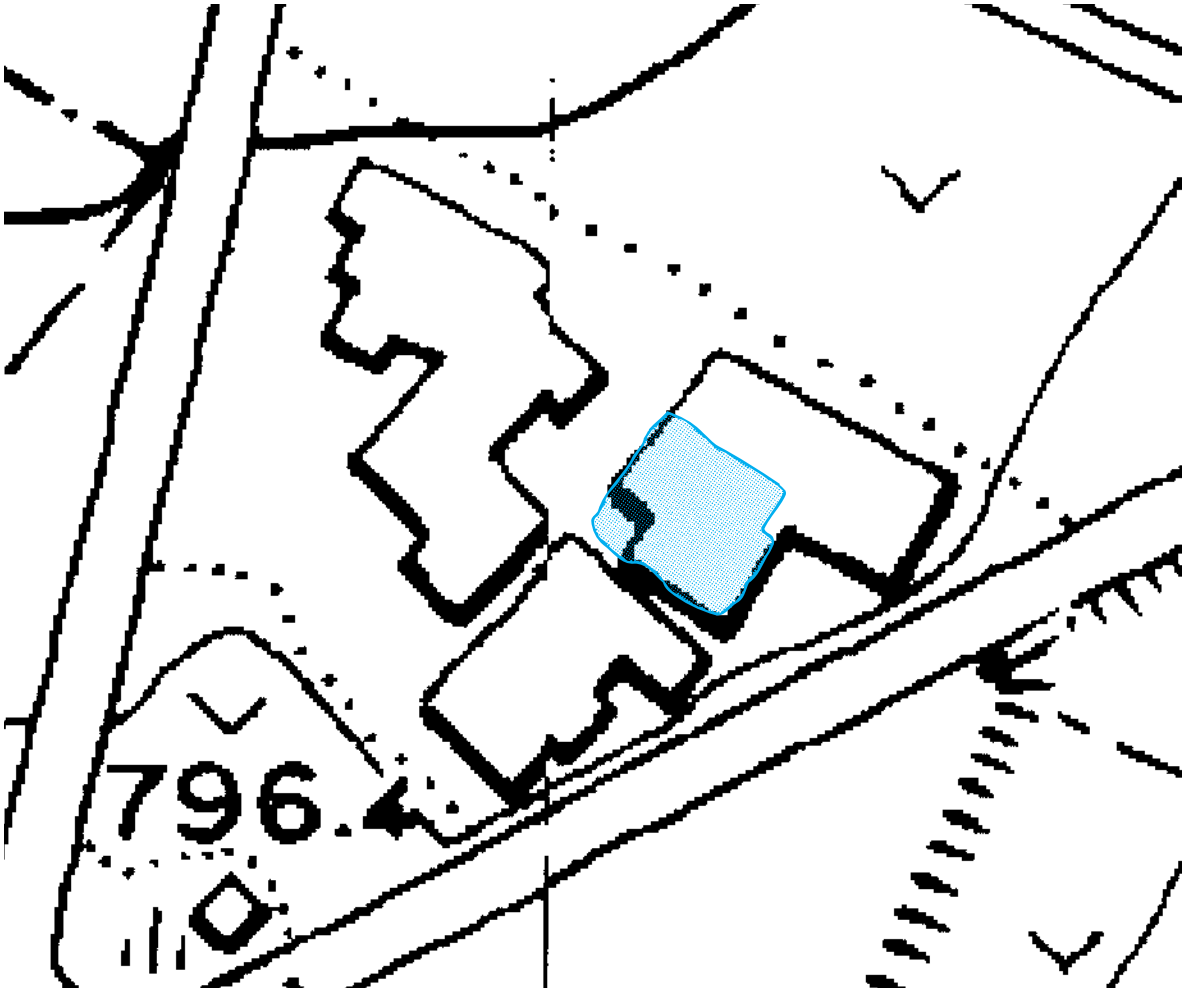
1. 保護協議の経過

辰野町では、平成20年度から、個人住宅建設等の小規模開発について、積極的に保護協議を行っており、今回も、その手続きの一環である建築確認申請書提出時に使用するチェック表によって開発事業を把握した。

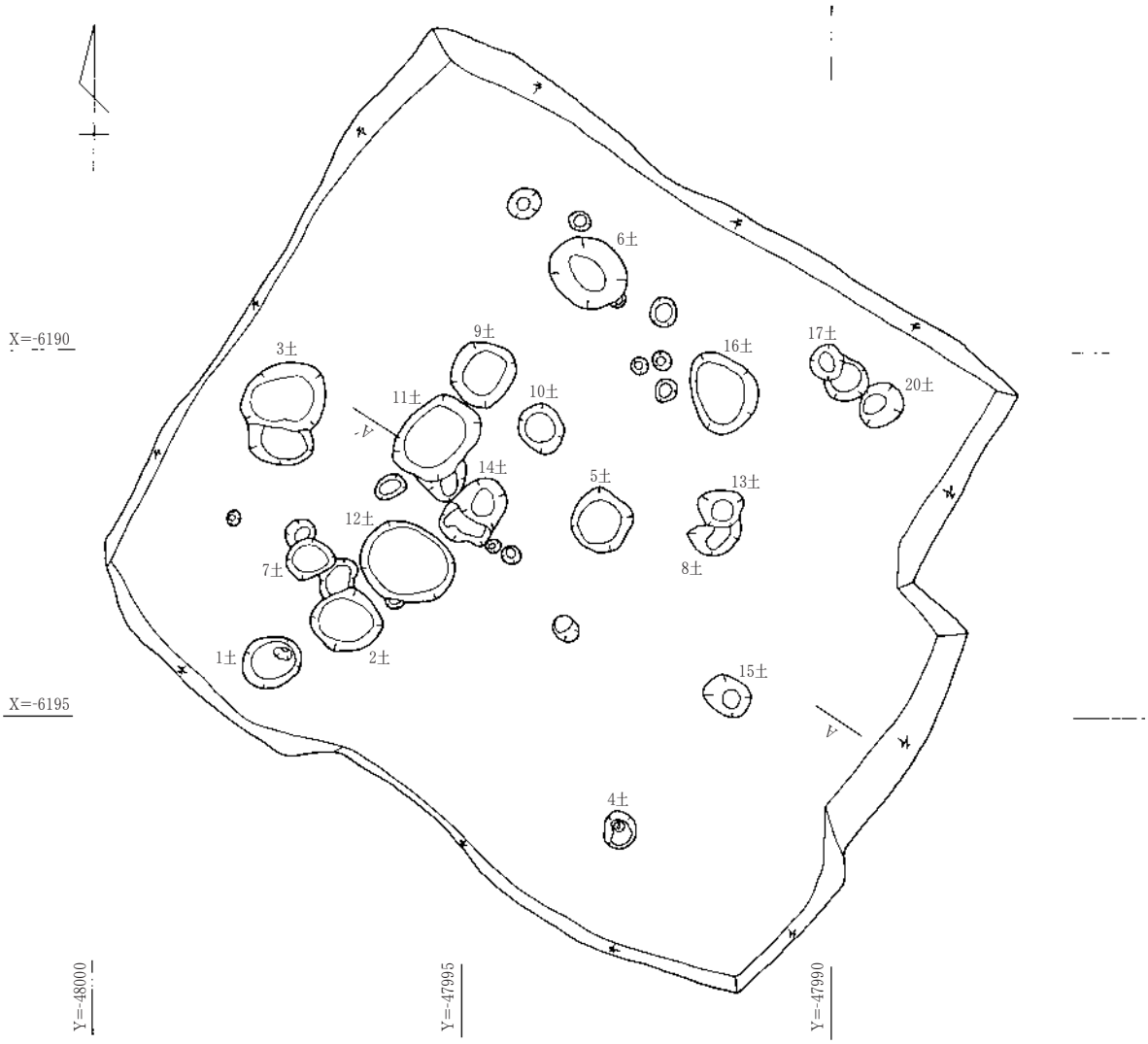
協議の席上、住宅メーカーからは、既存の建物を解体後、通常の基礎掘削を行うとの話であったため、調査を行うことが可能な掘削幅を確保できないとの判断から、工事立会いを予定していた。しかし、立会いのために現地に赴くと、地盤が不安定なため、土の入れ替えを行う事が判明した。このため、急遽試掘調査を行う必要を説明し、平成24年３月27日に試掘調査を実施した。

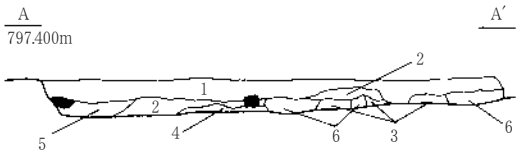
試掘調査を実施したところ、住宅の建設によってカクランされていた地点も確認されたものの、トレンチのほぼ全面に土坑が検出されたことから、本調査が必要であるとの判断を下し、掘削部分全面が調査対象範囲と判断した。

今回は、個人住宅の建設に先立っての調査であり、時間にも制約があったものの、遺構が出土したことから本調査が必要である旨をメーカーに伝え、時間を確保してもらうようにスケジュール調整を依頼した。その結果、約１週間の調査期間が確保でき、平成24年４月３日から同年４月10日まで調査を実施した。



第３図　調査区位置図（S＝1/500）





1：耕作土
2：暗褐色土（黄色土まじり、小石ややまじる）
3：暗黄褐色土（黄色土まじる）
4：暗黄褐色土（小石多くまじる）
5：暗黄褐色土
6：暗褐色土（黄色味をおびる）－土坑

0　3m

第４図　全体測量図

第Ⅲ章　発 掘 調 査

1. 調 査 の 方 法

今回の調査は、試掘の結果をふまえながら、基礎掘削予定地全域を本調査対象とした。

本調査は重機により耕作土を除去し、遺構検出面の上面が現れたところで、ジョレン等を使用して遺構検出作業を行い、遺構が確認された時点からは移植ゴテ等を使用して掘り下げた。

遺構の調査時には半割して土層を確認しながら掘り進め、掘り上がった遺構から実測図を作成し、記録につとめた。

出土遺物等の取り上げ、遺構平面図の作成に際しては、地籍調査の境界杭に設定された国土座標値（日本測地系）を利用し、トータルステーションを使って測量および遺物の取り上げを実施した。また、必要に応じて記録写真の撮影等を行った。なお、時間的制約のため、業者による基準杭の設定が実施できなかったため、グリッドの設定は行っていない。遺構測量は、トータルステーションによる変化点の取り込み、及び打ち出しを用いての、現地での結線作業を実施し、一部任意点を使用した簡易遣り方測量を行ったものもある。遺構図は、１/20の縮尺を基本とし、遺物出土状況図については１/10を基本とした。なお、基準標高については調査費用の問題から、都市計画図の町道に掲載されていた標高（796.4m）を使用した。

遺物整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には出土遺跡名（略称：ＭＴＹ）と遺物番号を註記した。

現場での写真撮影には一眼レフカメラを２台使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用い、出土遺物の撮影にはデジタル一眼レフカメラを使用した。

2. 調査結果の概要

この地域はこれまでの調査によって具体的な遺構の出土例がなく、三谷遺跡でも３回の調査が行われているが、今回の個人住宅に先立っての調査で初めて遺構・遺物が確認できた。

今調査では、土坑が20基出土し、このうち小型の土坑は浅く小規模であったが、遺物はこれらの土坑からのみ出土した。中でも第７号土坑からは、いわゆる焼町類型の土器が出土した。この土器は、町内で初の出土例と考えられる。また、器形復原はできなかったものの、藤内期と考えられる同一個体の土器片もまとって出土した。

一方、平面楕円形を呈する土坑は、直径１ｍ前後の規模であり、遺物の出土はなかったが、基本的に方向が意識されているような分布であった。出土地点も比較的まとまっており、周辺に展開されているであろう縄文時代の集落の墓域である可能性が高い。

そのほかピットも検出されているが、規則性は確認できない。

なお、遺構外ではあるが、周辺からは縄文時代後期の遺物も出土していることから、これらの土器に関連する遺構が検出される可能性がある。

第Ⅳ章　遺 構 と 遺 物

1. 土　　坑

⑴　縄 文 時 代

第１号土坑（第５図）

直径約60㎝、深さ約30㎝を測り、平面円形のプランである。覆土は暗褐色系の土であった。

遺　　物（第８図１）

この土坑からは１点破片が出土した。器台もしくは高台と考えられる。玉抱き三叉文と思われる施文がみられることから、縄文時代中期中葉と考えられる。

第２号土坑（第５図）

直径約70㎝、深さ約35㎝を測り、平面円形のプランである。覆土は　暗褐色系の土であった。

北部は、第７号土坑と重複していた。

なお、この土坑からは遺物は出土していない。

第３号土坑（第５図）

西部に水道埋設時のカクランが存在し、プランの把握が困難であったため、小規模な１基の遺構と判断したが、調査を進めた結果、２基が重複していたことが判明した。このため、観察畦を適切な場所に設定できず、土層観察を十分に行うことができなかった。

プランは南部の土坑が、長径約70㎝、短径約50㎝の楕円形、北部の土坑が、長径約90㎝、短径約70㎝の楕円形を呈していた。なお、北部土坑の底部から礫が出土した。

この土坑からは遺物は出土していない。

第４号土坑（第５図）

この土坑は、土坑が集中している地点からやや離れた箇所からの出土であった。長径約40㎝、短径約30㎝の楕円形のプランであり、底部の北部寄りにピットが検出されている。この周辺の土が暗褐色系の土であり、プランの把握が困難であった。覆土は暗褐色系の土が主体であった。

この土坑からは遺物は出土していない。

第５号土坑（第５図）

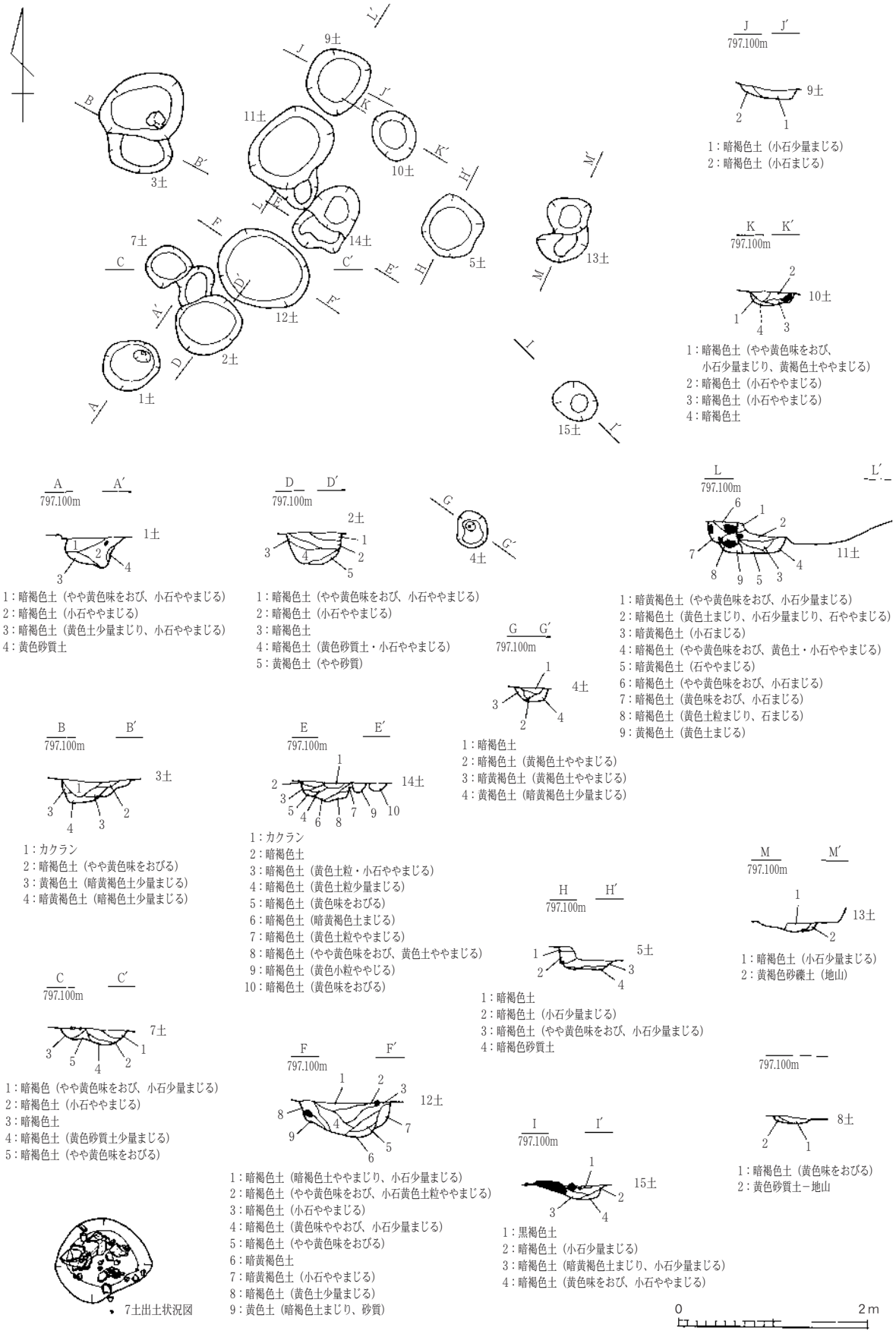
一辺約65㎝の平面不整方形のプランを呈し、深さは約25㎝であり、覆土は暗褐色系の土であった。この土坑は試掘トレンチで確認された遺構であり、試掘時に遺構検出面より深めの掘削であったことから、北半部について破壊してしまっている。

この土坑からは遺物は出土していない。

第６号土坑（第６図）

長径80㎝、短径70㎝の平面楕円形のプランであった。深さは約20㎝であった。覆土は暗褐色系の土で覆われていた。

この土坑からは遺物は出土していない。


9土
11土
10土
3土
14土
7土
5土
13土
12土
2土
1土
15土
797.100m
1：暗褐色土（小石少量まじる）
2：暗褐色土（小石まじる）
10土
1：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石少量まじり、黄褐色土ややまじる）
2：暗褐色土（小石ややまじる）
3：暗褐色土（小石ややまじる）
4：暗褐色土
1土
1：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石ややまじる）
2：暗褐色土（小石ややまじる）
3：暗褐色土（黄色土少量まじり、小石ややまじる）
4：黄色砂質土
2土
1：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石ややまじる）
2：暗褐色土（小石ややまじる）
3：暗褐色土
4：暗褐色土（黄色砂質土・小石ややまじる）
5：黄褐色土（やや砂質）
4土
1：暗褐色土
2：暗褐色土（黄褐色土ややまじる）
3：暗黄褐色土（黄褐色土ややまじる）
4：黄褐色土（暗黄褐色土少量まじる）
11土
1：暗黄褐色土（やや黄色味をおび、小石少量まじる）
2：暗褐色土（黄色土まじり、小石少量まじり、石ややまじる）
3：暗黄褐色土（小石まじる）
4：暗褐色土（やや黄色味をおび、黄色土・小石ややまじる）
5：暗黄褐色土（石ややまじる）
6：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石まじる）
7：暗褐色土（黄色味をおび、小石まじる）
8：暗褐色土（黄色土粒まじり、石まじる）
9：黄褐色土（黄色土まじる）
3土
1：カクラン
2：暗褐色土（やや黄色味をおびる）
3：黄褐色土（暗黄褐色土少量まじる）
4：暗黄褐色土（暗褐色土少量まじる）
14土
1：カクラン
2：暗褐色土
3：暗褐色土（黄色土粒・小石ややまじる）
4：暗褐色土（黄色土粒少量まじる）
5：暗褐色土（黄色味をおびる）
6：暗褐色土（暗黄褐色土まじる）
7：暗褐色土（黄色土粒ややまじる）
8：暗褐色土（やや黄色味をおび、黄色土ややまじる）
9：暗褐色土（黄色小粒ややじる）
10：暗褐色土（黄色味をおびる）
5土
1：暗褐色土
2：暗褐色土（小石少量まじる）
3：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石少量まじる）
4：暗褐色砂質土
13土
1：暗褐色土（小石少量まじる）
2：黄褐色砂礫土（地山）
7土
1：暗褐色（やや黄色味をおび、小石少量まじる）
2：暗褐色土（小石ややまじる）
3：暗褐色土
4：暗褐色土（黄色砂質土少量まじる）
5：暗褐色土（やや黄色味をおびる）
12土
1：暗褐色土（暗褐色土ややまじり、小石少量まじる）
2：暗褐色土（やや黄色味をおび、小石黄色土粒ややまじる）
3：暗褐色土（小石ややまじる）
4：暗褐色土（黄色味ややおび、小石少量まじる）
5：暗褐色土（やや黄色味をおびる）
6：暗黄褐色土
7：暗黄褐色土（小石ややまじる）
8：暗褐色土（黄色土少量まじる）
9：黄色土（暗褐色土まじり、砂質）
15土
1：黒褐色土
2：暗褐色土（小石少量まじる）
3：暗褐色土（暗黄褐色土まじり、小石少量まじる）
4：暗褐色土（黄色味をおび、小石ややまじる）
8土
1：暗褐色土（黄色味をおびる）
2：黄色砂質土－地山
7土出土状況図
0
2m

第５図　土坑実測図(1)

第７号土坑（第５図）

長径約45㎝、短径約40㎝の隅丸方形のプランを呈す。深さは約15㎝であった。覆土は暗褐色系の土が主体であり、この覆土中から土器片が集中して出土した。この土坑の上部が削平されていた状況から類推すると、上部にも土器片が存在していた可能性が高い。

なお、検出時は１基と考えていたが、掘り下げた所、２基の重複であることが判明したため、新・旧とし、改めて番号は付さなかった。

遺　　物（第８図５～13）

出土状況から同一個体の破片が出土したと判断していたが、接合作業を行った結果、数個体の破片であることが判明した。

９～13は同一個体である。波状口縁に楕円の区画文を２段持ち、体部に縄文を施文したモチーフで、キザミの施された区画文の内部には、一部に交互刺突文の見られる縦位の沈線が引かれている。

５はいわゆる焼町土器の体部である。縦位の沈線を密接に引き、上部に板状の粘土を貼り付け、刺突文を加えている。

６は爪形文を有する隆帯を区画文として施文した破片である。三角形の区画内には、集合沈線や三叉文等が施文されている。

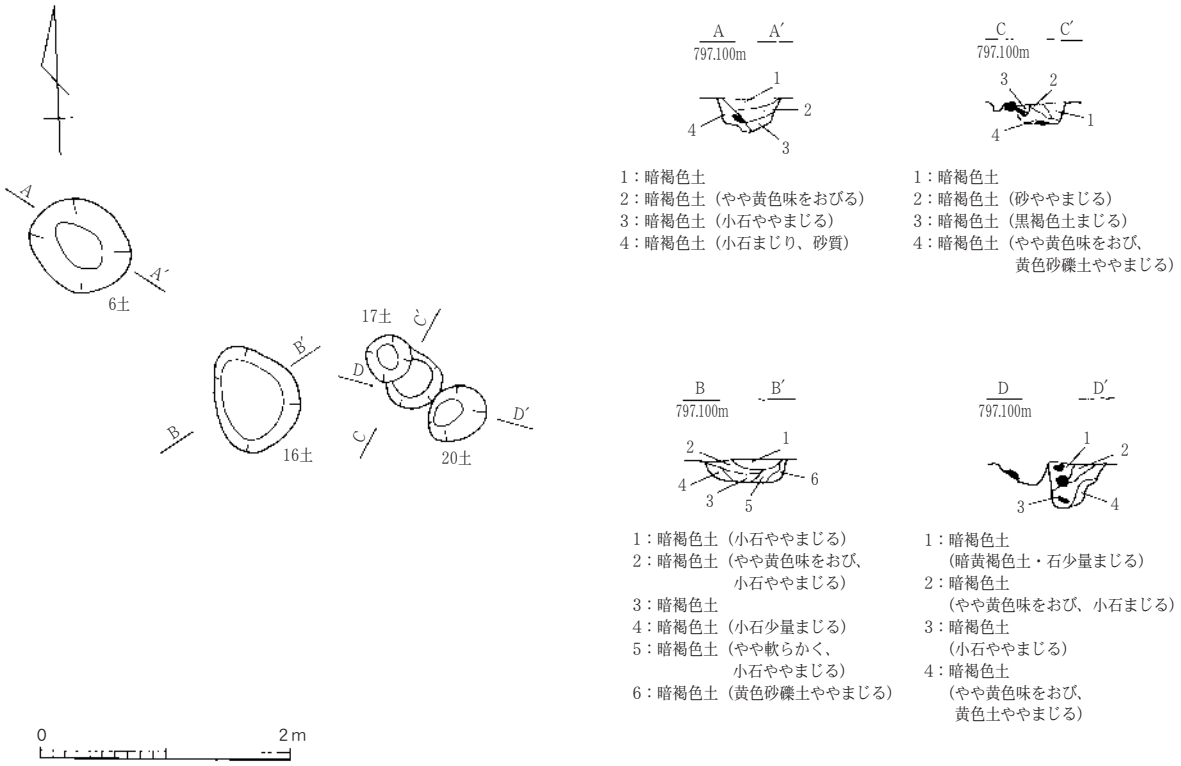
７は沈線が施文されている。

第８号土坑（第５図）

第13号土坑南部に隣接して出土した。平面プランも不整形であり、深さも10㎝程度であるため、遺構ではない可能性もある。

遺　　物（第８図２）

１点出土した。縄文を施文した口縁部の破片である。



第６図　土坑実測図⑵

第９号土坑（第５図）

長径約65㎝、短径約60㎝の平面隅丸方形のプランである。深さは約10㎝を測り、覆土は暗褐色系の土が主体であった。試掘トレンチによって上部を削り取ってしまったため、遺存状況が浅くなってしまった。

遺物は出土しなかった。

第10号土坑（第５図）

長径約65㎝、短径約45㎝の平面楕円形で、深さ約15㎝であった。覆土は暗褐色の土が主体であった。この遺構も第９号土坑と同様に、試掘トレンチによって上部を削り取ってしまったため、遺存状況が浅くなってしまった。

遺物の出土はなかった。

第11号土坑（第５図）

長径95㎝、短径70㎝の楕円形で、深さは約30㎝を測る。当初は円形プランと考えていたが、調査中に礫が混入物と把握できたため掘り進めた所、楕円形のプランとなった。覆土は暗褐色系の土であり、南西部を中心に礫が多く混入していた。

遺物は出土していない。

第12号土坑（第５図）

長径１ｍ、短径80㎝の楕円形プランで、深さは約35㎝を測る。覆土は暗褐色系の土で占められ、小石が混入した層位もある。

遺物は出土していない。

第13号土坑（第５図）

一辺約49㎝の不整方形で、深さ約10㎝を測る。覆土は暗褐色系の土であった。第８号土坑と重複している。

遺　　物（第８図３）

半截竹管状工具による平行沈線文を施文後、隆帯を貼り付けて、内部に押引文を施文している。なお断面にススの付着がみられる。

第14号土坑（第５図）

遺構検出時にプランを正確に把握できなかったため、土層観察を十分行うことができなかった。覆土は暗褐色系の土が主体であった。この土坑は、テラス状の高まりが検出されているが、平面形態については一部掘りすぎている可能性もあり、楕円形の可能性もある。

なお、遺物は出土していない。

第15号土坑（第５図）

長径約45㎝、短径40㎝の平面円形で、深さは約15㎝であった。覆土は暗褐色系の土であり、上層に礫が出土した。

遺物は出土しなかった。

第16号土坑（第６図）

長径約85㎝、短径約70㎝の不整楕円形で、深さは20㎝を測る。覆土は暗褐色系の土であった。

遺物は出土しなかった。

第17号土坑（第６図）

直径約45cmの円形と考えられるが、２基の重複を確認できずに掘り進めてしまったため、詳細を把握することができなかった。

深さは約20cmで、覆土は暗褐色系の土であった。なお、西部の重複した土坑内上層からは礫が出土した。

遺物は出土していない。

第20号土坑（第６図）

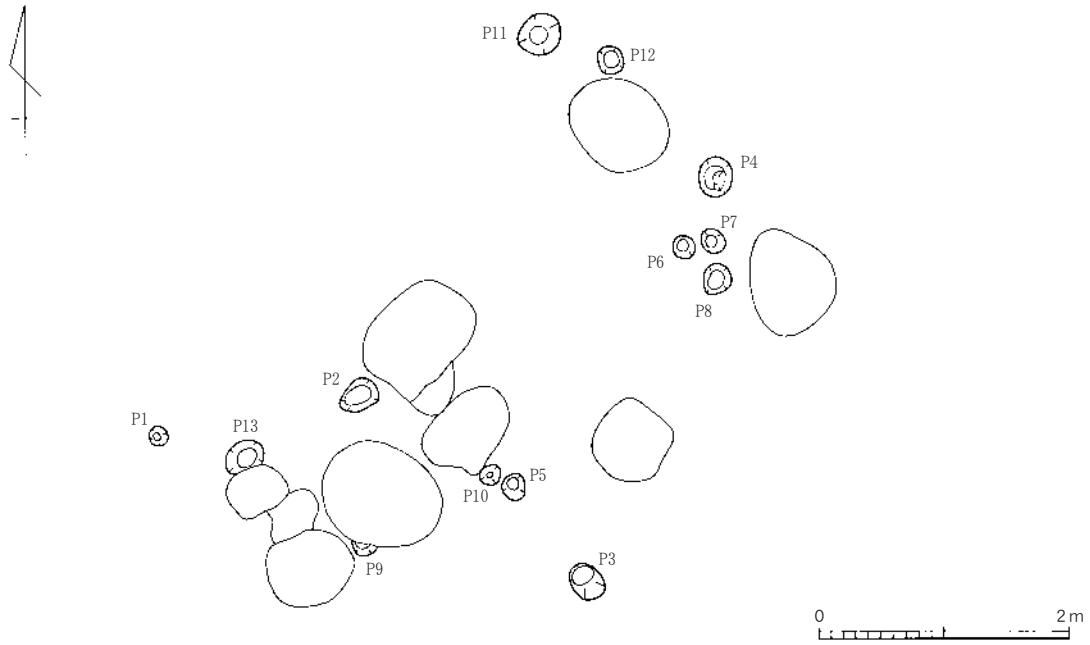
長径約50cm、短径約40cmの楕円形を呈する。深さは約35cmを測った。この土坑は第17号土坑と接するようにして出土した。覆土は暗褐色系の土であり、礫が混入していた。

遺　　物（第８図４）

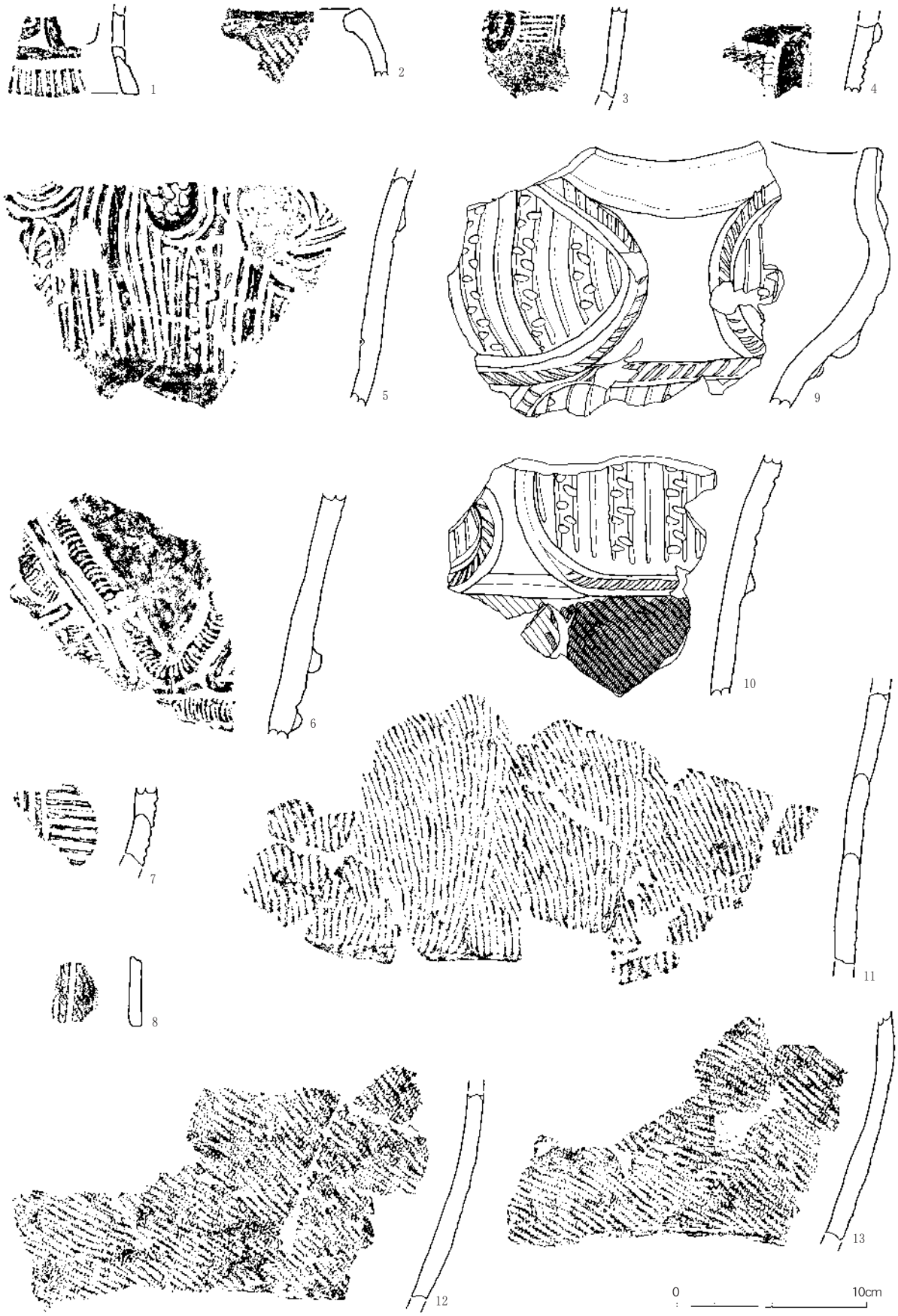
隆帯で方形に区画した脇に押引文が施文されている。内・外面にススの付着がみられる。

2. ピ ッ ト

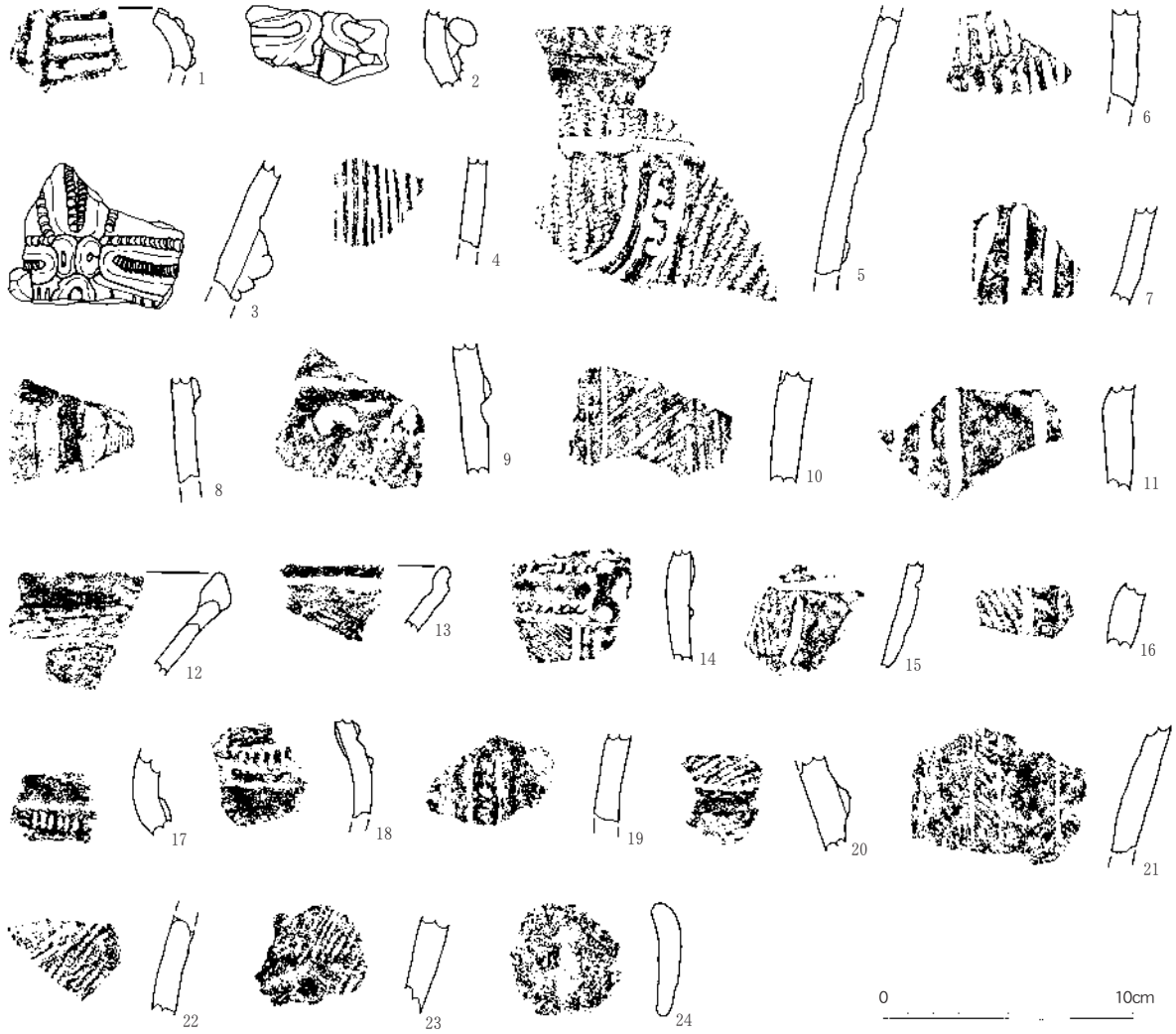
時期は明確にできないが、第７図に示したように、ピットが数ヶ所から出土している。いずれも小規模で、規則的な配列ではなかった。又､遺物も出土していない。比較的規模が小さいことから､中世以降と考えられる。



第７図　ピット実測図



第８図　土坑出土遺物



第９図　遺構外出土遺物

3. 遺構外出土遺物（第９図）

遺構検出作業中に出土した土器である。縄文時代中期と後期の土器片が中心である。１～11は中期の土器片である。いずれも中期後葉前半期と考えられる。１は粘土紐を梯子状に貼付した土器片である。２は粘土紐を横「U」字状に貼り付けて、屈曲部分を貼り付けている。３では屈曲内に押引文を施文している。そのほか沈線を施文している破片や、隆帯による曲線文を施文している破片もみられる。

12～24は後期の土器片である。横位の連続する刺突を持つ隆帯（14・18・19）や８字状貼付文（14）が施文されている破片や、半肉隆帯上に縦位のキザミを入れた破片（17～19）もみられる。その他、磨り消し縄文も施文されている。総じて縄文時代後期前半期と考えられる。

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の調査は、住宅の建て替えに伴って実施した調査であった。当初遺構検出時には解体前の住宅のカクランが多く、重機で客土を除去した状態では、遺構を把握することが難しかった。このため、再度手作業によって掘り下げると、遺構のプランが把握できるようになった。その結果、カクランによって破壊されていたと判断していた地点にも遺構を検出することができ、この調査地区に土坑群が存在していたことが判明した。

カクランは調査区の北西部の水道敷設地点が最も深く、南東部程浅い状況であった。また、地山は全体に礫を含む、扇状地で見られるような地層であったが、南西部については黒褐色土が堆積しており、礫の混入も見られなかった。この様な地層がどのような範囲に広がっているのか把握することはできないが、これより標高の低い地点に分布していると考えてよさそうである。

また、礫等の混入により、遺構検出時にプランを明確に把握できない地点もあり、土層断面図を的確に記録できなかった遺構も存在した。

土坑は、長径約１m程度の平面楕円形のプランと、直径30㎝程度の小規模な土坑の２種類に分けることができ、このうち、小規模な土坑から、土器の出土がみられた。中でも、第７号土坑からは、ある程度器形の判断できる破片がまとまって出土し、あわせて、いわゆる焼町類型の土器片も出土した。上面が、住宅建設時に削られていることを考えると、横倒しの状態で土坑内から出土したと考えられることから、半分は破壊されていると考えることができ、完形もしくはそれに近い状態で存在していた可能性がある。

なお、直径１m程度の土坑からは、遺物の出土はなく、覆土中に周辺の地山と同様の礫が含まれているのみであった。なお、第６・９～12号土坑は軸に統一性がありそうで、この地点に意識的に土坑を掘り込んでいる印象が強い。根拠となり得る資料がないものの、これらの土坑は墓坑と考えて良いのではなかろうか。

今回の調査では、縄文時代中期中葉と想定される遺構が出土したが、表面採集では、縄文時代前期末葉、中期初頭、中期後葉の土器片が採集されているが、今回は今までに認識されていなかった時期の出土となった。

採集された土器片の遺構も存在していると想定した場合、縄文時代前期末葉から後期前半期までにわたる拠点的な遺跡ともいえる。表土の遺物の現れかたからするとそこまでの規模を考えるのは難しいかもしれないが、今後この地域の遺跡の性格を再度検証していく必要があるかもしれない。

また、中期中葉の土器のほかに、遺構外からは後期前半期の土器片も出土していることから、付近に当該期の遺構が存在する可能性がある。

今回の調査は面積も小さく、遺存状況も良好ではなかったが、この地域の遺跡の様相を初めて知ることができた、貴重な調査ではなかったかと考えている。この調査成果が、今後の埋蔵文化財保護行政の一端を担ってくれることを願ってやまない。

報 告 書 抄 録

ふりがな	みつやいせき
書　　名	三谷遺跡
副 書 名	個人住宅建設に先立つ緊急発掘調査
著 者 名	福島　永
編集機関	辰野町教育委員会
所 在 地	〒399-0493　長野県上伊那郡辰野町中央1番地　　電話（0266)41-1681
発行年月日	平成24(2012)年11月30日

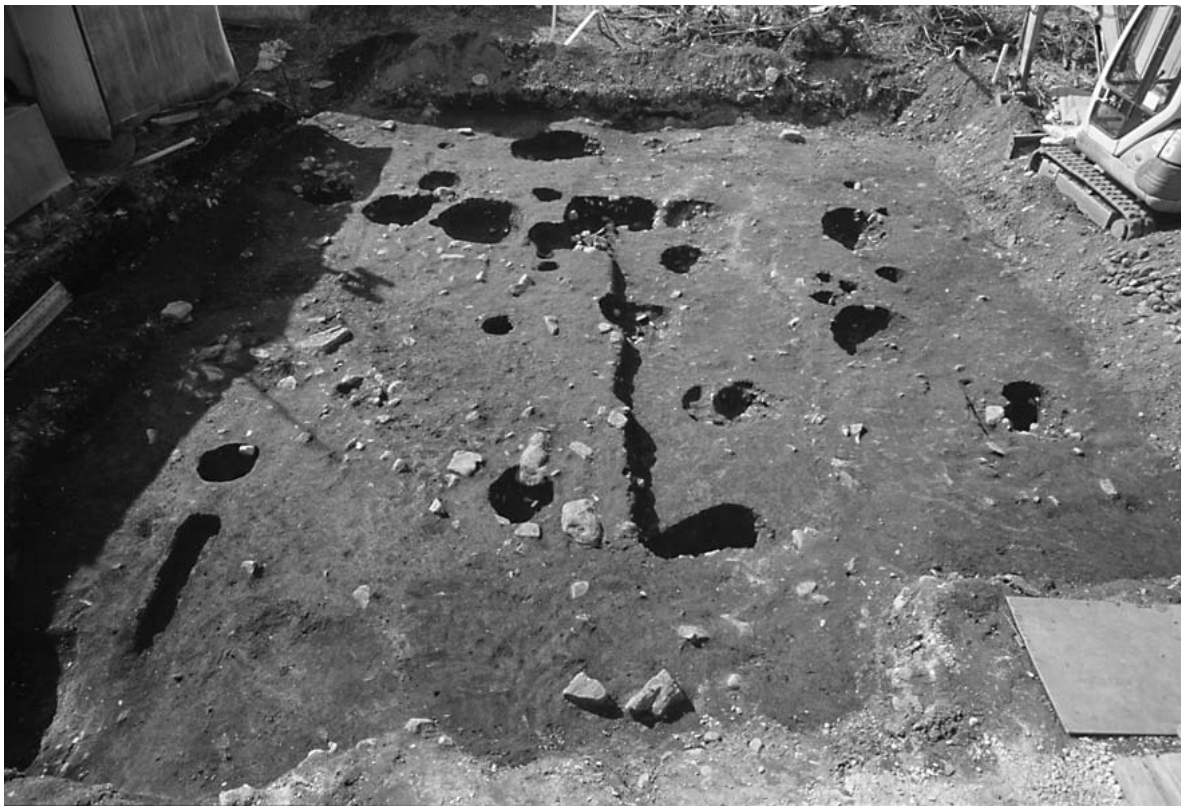
所収遺跡名（ふりがな）	所　在　地	コード		日本測地系		調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	北　緯	東　経		
三谷遺跡（みつやいせき）	長野県上伊那郡辰野町大字伊那富9204番地4	20382	108	35°56′46″	137°57′53″	20120327 ～ 20120410	350㎡

所収遺跡	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物
三谷遺跡	墓　域	縄文時代	土　坑　20 ピット　12	縄文時代中期中葉・後期土器

特記事項	上層は住宅建設時のカクランが見られたが、その直下から遺構を検出することができた。 今回は縄文時代中期の土坑が出土し、直径１ｍクラスの土坑については、墓坑の可能性が高い。また、遺物は小規模な土坑から出土し、縄文時代後期の土器片は、遺構外からのみ出土した。

遺 跡 遠 景

図　版　2



調査区全景

第１号土坑

第２号土坑

第３号土坑

第４号土坑

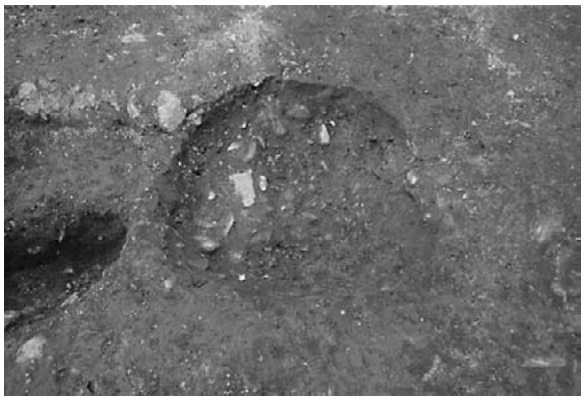
第５号土坑

第６号土坑

第７号土坑

図　版　4

第９号土坑



第10号土坑

第11号土坑

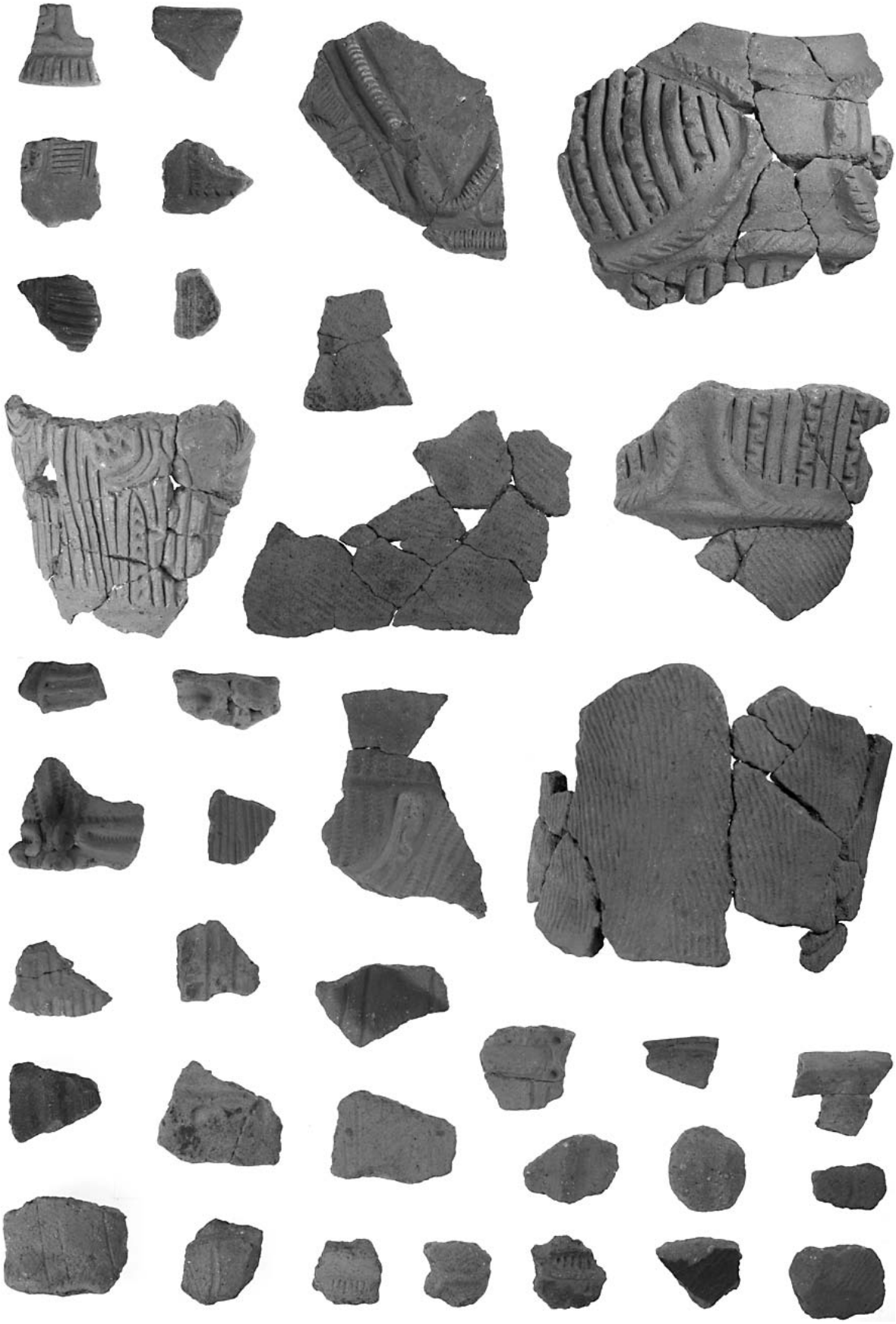
第12号土坑

第13号土坑

第14号土坑

第15号土坑

第16号土坑



出 土 遺 物

三 谷 遺 跡

平成24年11月30日 発行

編 集　辰 野 町 教 育 委 員 会
発 行　長野県上伊那郡辰野町中央１番地

印 刷　上　島　印　刷